洋学文庫
文庫8
C 58

古列亜呪没尓咨航誌

41 7441

上方ハ前より多病殊ニ外国ハ行旅中之事ニ付
所内ニ已来年々病死者多ク之五人ハ去ル五月
中ハ右病病者ニ付乱れ極ニ至り所ニ
付乱ニ成ニ付ニ麻田家伯母ニ極ニ強猛
ニ成病ニ付無之内ニ筆ニ又風邪瘟ト申病
ニ付同五月人年ニ懐ニ安事ニ付
於而安井仲平ハ別紙方剤ニ通ル試ル
時ニ飛ニ危多ニ付ニ一端ニ系図ニ添切

我儕微衰老を以て諸侯三角に面角の処ト角
呼吐強々偽れ和険に被接ち未見形国許家も
流行ち家常弱頃日承りの天下諸国一役ち
弱有志心以て和掛在冊に面角ト家方
亦医師に謀て成者患者成ら面角に対ち
海世ち助て成ら我者成友の皆一

八月八日

寺田左右馬
小南五郎兵

法谷種左衛門
村田仁右衛門
曽　左平

二条天皇様大御乃実ち諸人ち患多繁不安事ち
是仍武上ち公国許を亜米ト国アメリカ人形

見い瓦伝方義一の有ゝ以異ケ義を敬し
那不寄人ケゝに箇先持ゝ炮薬夏以要又れ之い
ケ持戦場義かゝゝ人ケ所ゝ有ゝ不知

本文伝城主通俊方藤右衛門今日ゝ
陝方言取平重ゝ有ゝ変法杏化命書
同月廿日飛文下ケ紙ゝ徳有ゝ

○愼獻按スルニ左ニ出ルカロールル下劑方此症初起ニ用テ効ヲ奏ユルヿ有ランカ
吐下已ニ多ク脉微細手足厥冷スルニ至ラ此ヲ用ハ効ナクシテ害アルヘシ
欽食停滯ノ吐泻旦崔乱吐泻等ニ用ヒハ大害アランヲ可恐結城杏仙考
ニテ結城立直ヘ用ヲトアル本文西結城氏ニテ質問スルニ此ノ方ニアラス傳聞
ノ誤ナリ今其方ヲ結城氏ヨリ得テ巻末ニ録ス○一男子巳ノ刻前ヨリ吐下
已ニ多ク脉細絶セントス欲シテ手足厥冷スヲ時至ラ一医両手ニ刺シテ血ヲ
出スヿ血数ヲ出テス又二医吐酒石ヲ服セシムル亦吐セス續テ本方カロールル下劑
三分ノ一ヲ用ユ亦下ラス雞鳴ニ至テ死○又大脉虚相同キアリ一医附
子前ヲ進テ後本方カロールル下劑ヲ用ユ暫クシテ後四気四リ
息者自ラ蕎麦ヲ好シナク食シ病衆脱ヲ抱クノ後ニ至テカロールル劑茉
カ嘶ク庭シ吐下再発シテ死ス此症特倒シテ茅ヲ由ユルノ誤ヲ此病死
ニ至ル近人事ヲ失ハサルモノ多シ
○此症ノ脉水毒等ノ上攻ノ脉ニ似リ

古列亜児没尓爸歇説

跋太亜勝亜　勃微尓著
江戸　戸田川榕蓼著

古列亜児没尓爸歇（コレアルモルビュス）ト名ル病東方諸國昔ヨリ多
ク患ル病ニシテ土人外人ヲ論セス老少男女ノ差別ナ
ク又毫モ前兆ナク卒尓ニ発ス○其症初起小
腹臍ヲ繞テ劇ク痞懣シ呕気ヲ催シ頻多泡
沫シ雜エル水ノ如キ秤液ヲ湧出シ又斉ク奏
乃是ヲ泻シ且重墜怒責甚シク始終腹中

痙攣痠痛甚ク搐搦シテ手足相牽縮シテ海
鰻ノ狀ノ如ク施テ脇筋ト胸筋トニ及ヒ全軀
四肢汗ヲ流シ顏面陷凹特ニ兩眼甚シク眼
中甚ク猛擰ニメ白色ノ粘液ヲ流シ脈沉小
ニシテ指下僅ニ按索ス内臟焮熱力如ク大
渴引飲常冷水ヲ呼ヒテ飲器ヲ欲サス煩
躁悶亂須臾モ安カラス卧蓐衣被總テ
櫛去シ或ハ擾床攫空 運線等 諸ノ危殆虛
極ノ諸症ヲ現スルニ至ル 次テ弦暈 搐搦

ヲ發シテ終ニ四肢氷冷シテ「ダニユス」厥ノ諸症
ヲ發シテ數角弓反シテ斃ル 解部及病因ハ之ヲ略ス 此病
ノ治法凡ソ三種ノ要訣アリ ○第一所謂劇甚
ノ症狀ヲ鎮止シ欲衛
既ニ閉塞セル皮表ノ蒸氣ヲシテ故ニ復セシム
ルニ在 ○第三ハ飲食消化器ヲシテ本然常度
ノ運度ニ復シ過不及ナカラシメ又ソレヲシテ再發
セシムルヿナキニアリ 此病ハ極テ速ニ發スルカ
故ニ治術ヲ施スモ亦常ニ速ナルヲ要ス其病

症酷々峻宜ニ人催ニ午時咸ハ一時ニシテ斃ル

故ニ効カ他ニ超テ輙ク効ヲ奏スル藥劑ニ非レハ救フ能ハス○左ノ一方ハ劇キ症率ヲ

○氏ハ一錢ヲ六十二分ヲ

タルニシテ一種ノ強烈ナル毒藥ニ

カロームルハ下部ニ用ルニ非ス目ニハ十氏ヲ極劇ノ下劑トス

緩和スルヿ屢効試スルニ百無遺策

各物考ニ甘汞ヲ用ヒ死屍ヲ殺シ死ニ至ルヿヲ云大人ハ三氏ヨリ五六氏ニ至ルトアリ

カルーメル二十氏

右末トシ左ノ飲液ヲ以テ送下之

○ヲヲハル錢

オンス

ナリ

阿芙蓉液六十滴薄荷水一ヲ

右ノ劑ヲ與ヘテ後患者ヲ温湯ニ浴セシムル

○亜剌吉酒

焼酎ナリ

丁雲時ニシテ後亜剌吉酒ト醋トヲ合シタ

ルヲ温メテ身体ヲ洗フヘシ○患者天稟多

血ナル者ハ鬚ク刺絡シ少シク昏冒スルニ至リ

太発泡膏ヲ胃ノ部ニ貼シ芥子ノ琵布ヲ両

脚両腓ニ貼シ左煎湯ヲ温メ屢蒸湯スヘシ

蒸湯法　加密列花煮湯適宜

阿芙蓉液　四十滴ヨリ六十滴ニ至ル

如此為スト雖モ呕吐復発シ厥冷モ速ニ退カサ

ルハ前ノカロームル阿芙蓉液ヲ尚一回與ヘ

リエメシチニムホラチレカム○ナシチニム「出扃方」ニ

劑表酒名

阿芙蓉ヲ多ク加タル者ヲ摩擦スヘシ尚峻症退カサル者「クロームル」ニ麝香菖蒲(ストレツ)私多僂謨或ハ他ノ揮発シテ精神ノ警覚スル茶呂ヲ加アタヘ水銀膏ヲ頸胸肺ニ多ク摩擦スヘシ患者大濁耐ヘ難キニ苦マハ左ノ飲科ヲ時々一二匙ツヽ與フベシ一頓ニ方ク與レハ百折シテ鎮メタルモ吐再発スルーアレハナリ

止渇飲科方

稍禾煮湯適宜

焼耐　少許

以上茶剤ヲ服スルノ間温震ヒ冷気冒サルヲ要ス右ノ諸方ニ由テ諸方解散シ身体固有ノ温気ニ復シ四肢関節ノ痙攣滅スルノ後ハ腸空虚セサルカ故ニ膽腹直ニ之ニ觸ル刺痛スルヿアリ故ニ左ノ下剤ヲ用テ勉テ之浮スヘシ

○下剤方　コローメル　十瓦

芍刺巴(ヤーラツバ)　細末ニカ或芒硝一匁ヲ用ルモ

ヤトラツパウシルトル亦良シ薄荷水ニ匁此ヲ用

テ大便利セシ後ハ胃腸大ニ衰弱ス故ニ芍薬
ノ健胃藥品（桜ニ亜児解毒 會竜胆ノ類）ヲ用テ可シ○右ノ諸方
ハ皆此地在留ノ政魯巴人ヲ療スルニ用ユ吾土
人（咬嚙毒ヲ人ヲ猖ヲ）ヲ療スルニハ上ノ「カロー丸」ノ量ヲヤヽ
減ズ可シ○又初発ニ左ノ散剤ヲ用ユヘシ
○其方ホスホルシユーレソウタ（製剤名製既文亜肪亜局方中ニ出ス）
芒硝各半弐揮発油一滴或ハ二滴此散剤ハ近世
ニ至リ「ヒウリチウス」常ニ用ユ但シ予思フニ此剤政
羅人ニ用テ効ナキノミナラス土人ト亘氏危劇ノ症ニ

至テハ此剤ノヨリ治スル所ニアラス

古列亜兒没尔苞斯沉終

安政五戊午八月下旬

英名玄庭復畝

本文活城治験ノ方二方

○阿芙蓉液一分　麝香三厘　薄荷水

右水八匁ニ混和シ四服ニ分チ四度ニ用ユ

○鎮吐飲　麻働（チンヤ）温芙亜（ヒヤ）三分　白穂五分　阿芙蓉液三厘

右三昧温湯五匁ニ混和シ一頓ニ服

悪病除方

○所守茉　所々農別名ニ出ス

○御丸茉　右同様　竹巖院君命野々村氏製之名奇効丸

雞冠石　硫黄　以上二味丸之　毎日服一丸

○一方　上方流行之方

木香一匁　藿香一匁　丁香五分　麦芽二匁

右四味以水三合五勺煎三合

○又方

唐木香二両　菓菓二両　蓮二両　白檀二両　木香二両　藿香二両

唐蒼朮二両　橘皮二両半

右八味粗末ニ分為常帯水煎服　葉　樒葉　雞卵　鹽藏魚

○苦参散　江戸より来ル方　右三味等分為末　毎日一三分ツヽ

梔上桂又　益智　干姜　数度用ユヘシ

茉名先生憶猷

○長崎御用達　西川某九月上旬御用着長崎表此病流行病死人甚多少長崎在留ノ和蘭人亦多少死ヽ也庶　石膏　一味ヲ用効シ得ルトヲ

憶猷ニ此方亦雖用参附ノ剤多効アルニ似メリ

Ganshodo
GH
東京 田神
巖松堂書店
No. 15,3,11
¥ 2,00
古今書籍所
巖松堂書店
東京神田
淡丁
調合

2